

# 六勝寺

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



六勝寺推定復元模型 (南東から)

現在、六勝寺跡と呼ばれる地域は、鴨川の東に広がる白川扇状地にある。付近には白川が流れ、九条山を越えて、東海道の終点である三条大橋に至るあたりに位置している。

この左京区岡崎一帯には、京都会館や京都市動物園・美術館などがあり、京都の文化施設が集中した緑の多い一画となっている。このあたりでは江戸時代以来、瓦や土塔が収集され、地名に法勝寺町・円勝寺町・成勝寺町・最勝寺町があることから、付近に六勝寺があったのではと考えられていた。

六勝寺が建てられたのは平安時代後期で、いわゆる院政期である。天皇の願いによって建立されたの

で御願寺と言われる。これらは、寺号にいずれも「勝」の字を持つため、総称して六勝寺と呼ばれている。各寺を建立順に並べてみると、法勝寺(白河天皇)承暦元年(1077)、尊勝寺(堀河天皇)康和四年(1102)、最勝寺(鳥羽天皇)元永元年(1118)、円勝寺(鳥羽天皇皇后待賢門院)大治三年(1128)、成勝寺(崇徳天皇)保延五年(1139)、延勝寺(近衛天皇)久安五年(1149)となる。六勝寺は、鎌倉時代までは再建や修理が繰り返されたが、天皇の力が衰退するとそれも不可能となり、最終的には応仁の乱(1467～1477)によって焼亡した。

六勝寺の伽藍配置は文献史料を

見る限り、奈良時代からの流れをくんでおり、さぞかし荘厳な威容を誇っていたと思われる。また、六勝寺の建立そのものが院政の権力を象徴するものでもあった。しかし、実際の造営にあたっては地方の国司(受領層)の力に負うところが大きかったといわれている。

六勝寺の調査は、1959年に京都会館建設工事にともなう発掘調査として、初めて本格的に行なわれた。

尊勝寺推定地は、京都会館のほかには武道センターなどを含む。これまでの調査で、金堂の基壇と東側回廊・東塔・西塔・阿弥陀堂・五大堂・観音堂・西限築地・北限溝など、六勝寺の中では最も多くの遺構が検出されている。



法勝寺跡 金堂東側回廊（北から）1986年調査



最勝寺跡 推定南限築地（西から）1991年調査



尊勝寺跡 阿弥陀堂礎石据付穴（西から）1978年調査



尊勝寺跡 五大堂雨落溝（南から）1986年調査



尊勝寺跡出土 軒瓦 1959年調査

最勝寺推定地の調査では、南限の築地と思われる遺構を検出した。現在の位置としては、岡崎公園グラウンドにあたる。

法勝寺推定地は、京都市動物園全域とその北側一帯が含まれ、調査では金堂と東側回廊・園池・水路・西限溝が検出された。

円勝寺推定地では、京都市美術

館の調査から、東限溝が検出されている。

成勝寺推定地は、国立近代美術館・勸業館跡にあたるが、明確な遺構の検出はされていない。

延勝寺推定地は、岡崎成勝寺町、岡崎円勝寺町のうち二条通と仁王門通に囲まれた地域の琵琶湖疏水より西地区、及び北門前町の二条

通・仁王門通の間の区域となる。調査では、建物地業の東辺部が検出されている。

これまでの調査では、多くの成果があがっているものの、六勝寺の正確な位置や規模を確定するまでには至っていない。今後の調査の進展が望まれる。

（吉村正親）